

ブラジルではさまざまな意味で公共空間が後退している。リオデジャネイロ、サンパウロなどの大都会ではメインストリートでさえ歩道の敷石が剥がれ穴ぼこだらけで、それが何年も放置されている。街路樹は車道の拡張によって次々に切り倒され、かろうじて残ったものは排気ガスに喘いでいる。公園は十分な手入れがなされず不潔で、おそろしく治安の悪い場所になっている。建物はかつては、住宅街にしろビジネス街にしろ高さ、色、デザインなどで調和がとれていたが、高層のアパート、ガラス張りのオフィスビル、派手な広告などが風景を無秩序に切り刻んでいる。モノを売買するとともに人々が集う場所であった商店街はほとんどが廃れてしまった。

他方で、私的空間は確実に前進している。高所得者は美しく植栽がほどこされ高い塀で囲まれた住宅に住み、一部は、悪化した治安、大気汚染を避けて、厳重に警備された一種のゲットーに移動している。限られた人口を対象とした、ブランド品を並べた専門店、ショッピングセンターが賑わいを見せている。都市周辺あるいは中心地でも空き地、道路際、川べりなどはスラムによって占拠されている。貧困が公的空間を侵食し私的空間に変えている。公共交通が未発達一方で、個人的な移動手段である自家用車が都市をうめつくしている。

後退しているのは物理的な意味での公共空間だけではない。コミュニティ、市民社会という意味での公共空間もまた後退している。住宅にめぐらされた高い塀は、悪化する治安への防衛手段であるが、社会との交渉を拒否するとの意志の現れでもある。貧困層による空間占拠は交渉ではなく暴力的手段によって問題を解決しようとする行為である。街路はもはや人々が出会い会話する場所ではない。川辺は人々が散策し憩う場所ではなくなってしまった。スペイン人ほどではないが、ポルトガル人もまた都市設計に情熱を注ぎ、大小を問わずブラジルの町々に広場 (praça) をつくり教会、市庁舎などを四方に配置した。しかし現在では広場は、人々が日常を語り政治を論じる場所ではなくなってしまった。

ブラジルはもともと多数の移民から構成されるなどの理由から、信頼を形成しがたい社会である。加えて著しい社会格差が人々の間で対立、憎しみを生んでいる。血縁などを除いて人々が団結し協力する契機が乏しい。こうした社会関係が都市にも反映している。人々の逃避、対立は、公共空間を衰弱させ、住宅、交通、犯罪、環境など都市がかかえる多様な問題の解決を困難にしてしまう。

しかしながら、ブラジルでは公共空間創造への努力がなされていることにも注目する必要がある。スラムなどの貧困地域では、住民が協力して住宅を建設し、NGOが住民に教育、医療・衛生のサービスを提供している。市民と共同してゴミのリサイクルなど環境問題に取り組んでいる自治体が増えつつある。中央でも、カルドーゾ政権が、市民のための行政改革を進め、社会開発において住民の参加を重視している。都市あるいは広く社会がかかえる問題について、その解決を政府だけに任せるのではなく、また市場にすべて委ねるのではなく、住民、市民が集い議論し行動し解決する試みがささやかではあるがブラジルで始まっている。

公共空間の衰弱と私的空間の拡大という問題は、実は、官僚組織と私企業の役割が肥大し、住民、市民の活動領域あるいは公共空間が著しく狭められた日本にも存在する。ブラジルで始まった公共空間の創造への試みは日本社会にも多くの示唆を与えるものである。